Internal Medicine 2008, the annual meeting of the American College of Physicians, in Washington, D.C., accompanying Convocation Ceremony

宇　野　久　光

日本赤十字広島看護大学紀要　第10巻　（2010年３月発行）別刷

【研修報告】

Internal Medicine 2008, the annual meeting of the American College of Physicians, in Washington, D.C., accompanying Convocation Ceremony

宇　野　久　光*

はじめに

American College of Physicians（米国内科学会；ACP）は，世界80カ国以上の国々に約12万５千の会員を有する，単科の学会としては世界最大級の学会である。ACP は1915年創立の米国内科専門医会と1956年設立の米国内科学会（ASIM）が1998年に合併して設立された内科専門医の団体である。またその支部は国内，カナダ，メキシコ，ブラジル，中米，ベネズエラ，チリ，日本などの国や地域にある。

日本支部は2003年に黒川清先生（元学術会議会長，元内閣特別顧問，東大名誉教授，政策研究大学院大学教授）が初代 Japan Chapter Governor として中心になり設立された。現在私は，ACPJapan Chapter の理事をしており，Publication Committee の委員長としての任務などを遂行している。

ACPの年次総会であるInternal Medicine 2008が，Washington, D.C. で2008年５月15日～17日に開催された。私が参加を決めたのは，以下の４つの理由があった。

１．今回の学会長である Davit C. Dale 先生に本年４月に日本で Japan Chapter Scientific Meeting に来ていただいて，College Update の講演をしていただいた際のお礼と，Japan Chapter 理事として ACP の運営方針について伺う予定であったこと，

２．ACP には一般会員資格に加えて，学問的業績，社会貢献度，医学教育貢献度，自己研鑽度などを綜合評価して，それが優れているとみなされれば，上級会員である Fellow in the American College of Physicians（FACP）に昇格することができる。この書類を提出するのには大変な手間と時間がかかるが，2007年10月に FACP 昇格の知らせが届き，本年の年次総会の Convocation Ceremony（原義は聖職者会議や大学の式典集会）への招待状が来た。世界中から new Fellows が集まる厳粛な式典の様子を見聞きしていたので，一生に一度の晴れがましい舞台（？）に出席したかったこと，

３．私は ACP Japan Chapter の Publication Committee 委員長として，Annals of Internal Medicine（旬刊）と ACP Internist（週刊）の日本語版の編集を行なっているが，昨年は ACP Internist（旧 Observer Weekly）の翻訳事業に対して，Evergreen Award が授与されたが出席できなかった。本年は Annals of Internal Medicine の翻訳に対して Evergreen Award が授与されることが決定になったので，是非授賞式に出席したかったこと，

４．Washington D.C. は Virginia 州に隣接し，昔私が assistant professor として勤務していた Charlottesville の University of Virginia（UVa）の北に位置しており，車で３～４時間の場所である。今回，UVa の Department of Rheumatology の Shu Man Fu 教授の研究室を訪問する予定があったこと，

などである。

Scientific Program Sessions

学会会場は Washington Convention Center で，ここは年中米国内外の大きなイベントが催されているところである。今回の学会には7000人近くの内科医が全米と ACP 支部がある国を中心として参加した。今年の学会では，３日間の会期に合わせて260にもおよぶワークショップ，講演，パネルディスカッションが催された。さらに，Washington, D.C 市内の複数のホテルで各種シンポジウムも平行して開催され，朝から晩までスケジュールがびっしりつまっていた。会場受付を済ますと，Schedule-At-A-Glance という会議予定の日程と自分の予定が書き込めるようになっているノートが配布され，利便が図られていた。

日本の内科学会総会と違うのは，Learning

＊　日本赤十字広島看護大学　専門基礎　uno@jrchcn.ac.jp

Formatsと称するものの内容が多彩で参加型であったことである。Clinical Pearlsとよばれる症例提示では，参加者がキー・パッドを持って答えながら解説者と一緒に症例を考えるものであった。また，Clinical Skill Demonstration, Multiple Small Feeding of the Mindなど臨床現場でのスキルを教えるもの，Meet the Professorなど個別テーマに即しての講演での質疑応答など，いずれも臨床現場に即した参加者一体型の企画に思えた。私は専門の血液領域のMeet the Professorなどに出席した。また，受付で渡された分厚いInternal Medicine Updatesは，前年度に一流雑誌に掲載された，各種内科領域のほとんどの論文が短くまとめられて１冊の本になっていた。これ１冊あれば各領域の１年間の重要なupdatesがわかるようになっていた。しかし，日本の内科学会総会のように学問研究成果の最新のまとめといったものがなかったのは，少し物足りない気がした。これは学会の性質の違いであり，ACP学会はあくまでも第一線で活躍しているプライマリケア医が中心であるため，現実対処のためのknowledgeとskills中心であった（図１）。

図１．会場のWalter E. Washington Convention Center

Convocation Ceremony

ACPのConvocationはnew Fellowsと学会に功績があったものを表彰する式典であるが，これは長い歴史を持ち，第１回は1916年に挙行されている。今回のnew Fellowsの最年少は31歳，最高齢は96歳であったが，概して年配者が多く家族で参加している医師が目立った。広い会場のあちらこちらで，夫または妻の晴れがましい姿を家族で祝っている風景が見られた。私も式場の控えの会場で，予めメールで知らせておいたサイズのacademic regaliaとhoodを試着し本番に備えた。この正装は12世紀のヨーロッパまで遡り，当時の学生と教員が用いていたようで，その後Oxford Universityがacademic dressとして採用し，以後それぞれの学問分野で変化していったようである。米国ではIntercollegiate Commissionが設立されてから英国風をまねて，今日の姿になったとのことである。ちなみに，米国ではガウンに絹地を用いることができるのは，MD, PhD, JDだけで，さらに医師のみがhoodのtassel（飾り房）に金色を用いることができるのだそうである（図２）。

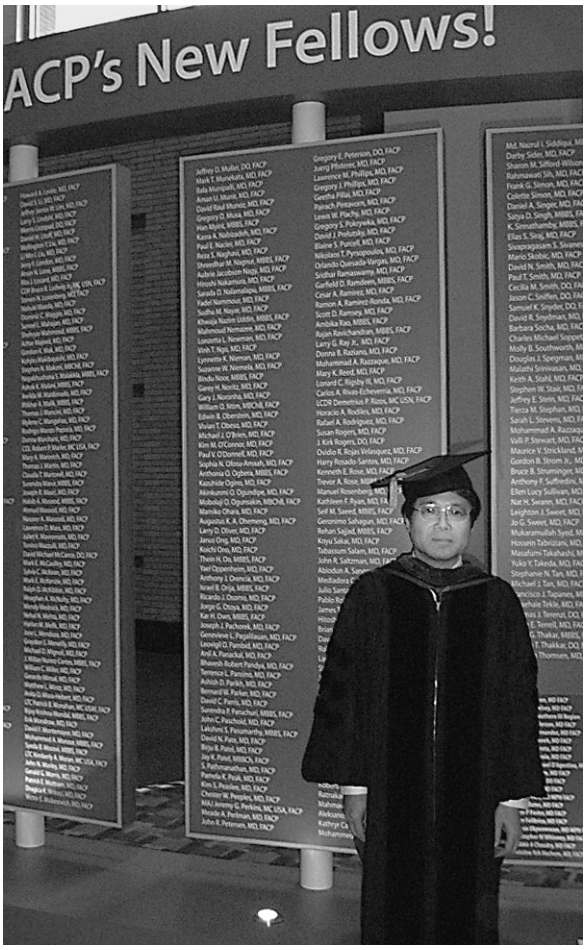

図２．New Fellows掲示板の前でacademic regaliaの正装をした筆者

式典まで時間があるので，この古式のacademic dressのままで，広いConvention Center内の会場の講演や会議に出席することとなった。廊下ですれ違う人や会場の周りの人などあちこちで「Congratulations !」と声をかけられ，初めてこの正装の意味が少しわかってきたような気がした。件の式典は夕方６：30から始まり，今回のnew Fellowsは支部毎に控え室に集まり，各支部ごとに列を成して式典会場に入場することになっていた。結構な人数のJapan Chapterの列の最初の方に並んで入場したが，会場の拍手とテレビカメラに私の気分も少し高揚してきた。全員が席に着くと全員起立

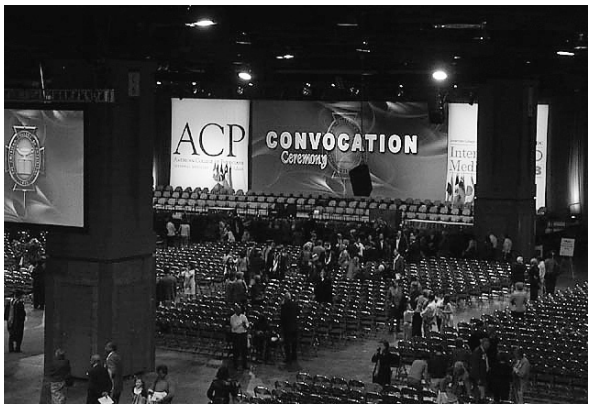

図３．Convocation Ceremony の会場

図４．ACP 会長の Davit C. Dale 先生と筆者

しての米国国家の演奏から始まり，Dale 会長の医学教育と医師の責務についての興味深い話を交えた格式高い祝辞があった。続いて Chair of Credential Committee による各 Chapter の新 Fellows の紹介があり，ACP の Pledge（誓約）を全員で唱和した。

その誓約は，

I affirm my belief in the mission of the American College of Physicians

To preserve and maintain the highest traditions and precepts of our professional calling

から始まり，以後朗々と唱和して，最後は，

I hereby pledge to uphold the ethics of medicine as exemplified by the standards and traditions of this College

で終る医師の責務を説いた，韻を踏んだとても格調高い誓詞であった。

また，各種 Awardの紹介では，Evergreen Award の紹介で，Japan Chapter の私の名前も会場のスクリーンに映し出され，とても誇らしい気持ちになった。

古式豊かな荘厳な式典の中に，医師のprofessionalism と volunteerism を肌で感じた式典で，私の一生の思い出となった（図３）。

International Reception 等

ACP の役員や，世界各国の内科学会の役員が主席する International Reception が会期の中頃に開催された。Japan Chapter の member は前もって出席するように連絡してあった。この席で，各国の Chapter の役員と知り合いになることができた。また，Dale 会長と親しく話をさしていただき，現在の Japan Chapter の事業等について伺うことできた（図４）。

翌日のJapan Receptionは各国の代表を招いての，Japan Chapter 主催の Japan Reception で，ACP の主要な役員や各国委員を招いてのいわば接待パーティである。後で聞いた話では Japan Reception が最も盛況の reception の一つであったそうである。国際親善も Japan Chapter の役割の一つであることを再認識した（図５）。

最後に，会期の間に時間を盗んで，往路は飛行機で帰路はタクシーという強行スケジュールで，滞在時間はわずか２時間であったが，Virginia 州 Charlottesville の UVa の研究室を再訪することができたのは，幸甚であった。

後日談であるが，2009年夏 UVa の Shu Man Fu 教授に広島に来ていただいて Rheumatology の免疫学の講演していただき，原爆ドームなどを案内して存分に久闊を叙すことができた。

謝　辞

本学会に出席の機会を与えてくださった日本赤十字広島看護大学に感謝いたします。

文　献

ACP International Newsletter（2008）. 20, 1 －5.
Internal Medicine 2008 Preview（2008）. ACP Internist　28, 12－18.

図５．Japan Reception